
兎さんと狼さん

白餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兔さんと狼さん

【Nコード】

N7140Y

【作者名】

白餅

【あらすじ】

お前が>おおかみくになって地球を救え、そう元生徒会長五月雨に言われ、半ば強制的に従わされた白卯。

神は退屈しのぎの戯れに>うさぎくを創った。>うさぎくは、嘘の習性とされる寂しいと死ぬ、というところから持ち出されている。

ただ、神の作った>うさぎくは、寂しくなつて一定期間を過ぎると地球まるごとまるめて爆発させてしまうらしい。これが、五月雨達

が逃れたい>絶望状況<。

この危機を逃れるために、五月雨は白卯に命令する。

現代、空想、中二、妹愛、滅亡、ファンタジー……いろんなの詰め込んだらこうなりました。

11/20 執筆開始、のろのろ更新していきます。

第0話 お手紙

『うさぎさんは、寂しいと死にます』

だから、はやく来ないとうさぎさんが世界を巻き込んで死んじゃいます。

何故って？

簡単です。誰もうさぎさん自身を見てくれないなら、うさぎさんにとって、この世界に価値を見いだせなくなるからです。

だから、地球を巻き込んで死にます。恨めしいからです。期限は1年だけ。

うさぎさんを助けてあげてください。

あなたに拒否権はありません。

拒否した場合は、大切な人を殺します。悪しからず。良い、と言つならば、迎えにいきましょう。

では、また。

—世界とうさぎさんを救おうの会—

第1話 物語の起点

朝、出勤や学校に行く生徒、ランニングをする人々が目立つ頃。人々の息は白く、蒸気のように上にあがり、溶けるように霧散した。まわりの木々はといえば、もう春だと言つのに葉っぱ一枚つけずに揺れている。

俺は、マフラーをつけ、一息ついて外にでた。

瞬間、木枯らしのような冷たい風が俺に襲い掛かり、思わず身震いする。

やばい、この寒さは尋常じゃない。ぶっちゃけ、去年の冬より寒かった。

誰だよ、今日は春一番の暖かい日になるでしょう、とか言ったの。やっぱり、サボろうかなあと、家の前で考えていたら、

「じろおおおうつつ!!」

春風にのって、たたき付けるような声が出た。

「炬燵……」

明るく子供っぽい声からして、すぐに誰のか分かる。長い茶髪に、まだ幼さ残る顔。肌色はしろく、瞳は黒色の二重だ。名前を、

月見草 炬燵という。

俺、寒菊 白卯の幼なじみである。

炬燵は孤児でありながら、容姿端麗、文武両道のパーフェクト娘だ。俺からみれば、若干男子としての劣等感を感じてしまう。

「おはよ!! 奇遇だねっ。一緒に学校いかない?」

奇遇も何も思いつ切り走ってきたじゃないか、と言おうとしたが、寒くて舌の呂律がまわらなかつたので、頷くだけにした。頷いた俺に、炬燵が表情を輝かす。

「……まあ、なんだ。とりあえず、おはよ」

俺はマフラーに口を埋もらせながら挨拶を一応返した。

「うんっ。はやく行こっ」

きらきらとした表情で、炬燵が一步前にでる。

「おう、……ん、手紙」

ふと気付けば、ポストに半分軽く入れられた封筒らしきものが入っていた。……ちゃんを入れてほしい。

溜息を浅くはいて、手紙を手にとり差出人を見ようと裏返すと、書いていなかった。

封筒は、真っ白で貴族がやるような赤い印が押されている。

「……誰？」

炬燵が隣から盗み見をして、首を傾げた。

「あー、分かんないけど、後で見るわ。さっさと行こうぜ。遅刻しそっだし」

手早く封筒を鞆に押し込み、黒のスライド式携帯で時間をみる。時刻は8時15分。遅刻は、8時30分から。つまり、あと15分。

「へっ!!?嘘、やだ、遅刻しちゃう!!白卯っ、無欠席無遅刻無早退に傷がついちやうわっ!!」

ギンツ、と柔和な笑みが一変。鋭いまなざしになり、学校方面を見てクラウチングスタートのような格好をすると、

「はっ!!?ちよ、炬燵!!?」

「生徒会長として、嫌だああああっ!!」

脱兎の如く走りだした。

そんな炬燵をみて、深く溜息をついた。

完璧といえる炬燵の裏は、正義感が強く、偽善者自己犠牲。自分の利己の為に動く。人のために良いことをして怪我をしても、いい人、と言われれば結果オーライ。正義感の為に、自己犠牲をし、自己犠牲をやりながら良いことをする。

いつからそうだった?

根っからの優等生だなあ、と感心しながら俺も歩きだした。学校までは10分で行くし、大丈夫だろう。

そこで、先ほどの封筒を手にとり、封を破った。

『うさぎさんは、寂しいと死にます』

だから、はやく来ないとうさぎさんが世界を巻き込んで死んじゃいます。

何故って？

簡単です。誰もうさぎさん自身を見てくれないなら、うさぎさんにとって、この世界に価値を見いだせなくなるからです。

だから、地球を巻き込んで死にます。恨めしいからです。期限は1年だけ。

うさぎさんを助けてあげてください。

あなたに拒否権はありません。

拒否した場合は、大切な人を殺します。悪しからず。良い、と言つならば、迎えにいきましょう。

では、また。

「世界とうさぎさんを救おうの会」

はっ?と、俺は固まった。

「世界とうさぎさんを……、救おうの、会?」

啞然として、再度、目で手紙を読み返す。

世界を巻き込んで死んじやいます?

うさぎさんを助けください?

期限は一年?

大切な人を殺す、って。

「……ばっつかじゃねえの?」

実を言うと、こういう脅迫文のようなものは苦手で、少し声が震えていた。捨てようと思ったが、あたりにごみ箱はない。まさか、ポイ捨てなど出来なかった。

少し考えてから、手紙を握り潰すとポケットに突っ込んだ。学校に行ったら、破いて捨てよう、と頷いて、驚きのあまりに立ち止まった俺は、また歩き出す。

『拒否した場合は、大切な人を殺します。悪しからず』

その言葉が蘇ったが、頭を振って忘れようとする。嫌な嫌がらせだ。きつと、妹の祈^{まご}葉^はが入れたのだろう。昨日、彼女が楽しみに取っておいたシュークリームを食べてしまったのが原因だろう。後で叱ろう。全く。

ああ、なんか朝から嫌な予感がする。

手紙のせいかもしれないが、胸騒^{むしやう}ぎがした。

第3話 信じなかったゆえに

「きりーっ、れーい」

倦怠感を催した声と共に立ち上がり、

「おはよーございまーす」

それぞれの面倒臭そうな声の中で、俺はしっかりと挨拶した。頭こそ凡人並だが、だからこそこういうことは真面目にやっている。

此処は、私立の中高一貫校の『吾妻学園』だ。

俺の家は、父は外交官ということもありあまり居なくて、母親は、妹を産んでまもなく蒸発した。なんでも、『やらなきゃいけない事があるのっ』とか、かっこいいこと言っ居なくなったらしい。(俺も当時は小さくて母のことは覚えていない。)

まあ、そんなわけで、公立の高校やら入ると手続きが面倒になるので、中学半ばで父が居る間に私立に編入した。俺は中3の時、妹が中1の頃だ。

元々、炬燵は、援助金とやらで無料になるらしく、その私立校に入っていたし、中学校の友達と別れるのは辛かったが、さほど悲しくはなかった。

今でも、会おうと思えば会えるし、よく遊んでいる。

「白卯、遅刻しないで良かったね」

一足以上はやく学校に着いた炬燵が、朝の学活が終わってから近づいてきた。

「ったく、お前から」一緒に行く」って行ったくせに」

口をとがらす俺に、炬燵は、むっ、として腕を組んだ。

「仕方ないでしょ、生徒会は生徒の鏡！ 模範生で居なきゃ！！」
「だったら、山茶花は何なんだよ……」

天鷹 山茶花、生徒会会計の美男子。不良らしく金髪で、いつもヘッドフォンで音楽をきいている。しかも、かなり喧嘩沙汰

は多いみたいだ。だが、そういうのと人に無関心というのが相まってもてる。

山茶花こそ、生徒会の一員として恰好を変えるべきだ。

そんな彼は前年からずっと生徒会をやっている。なぜかと言えば、前会長（今年度卒業で任期は終わっている）の熱烈な支持故だとか。

支持だけならやらないだろうが、我が高校では推薦されたら必ず立候補しなければいけないという規則がある。なので、渋々立候補。結果、当選してしまったらしい。

ちなみに、俺も生徒会の一員だったりする。

役は、……副会長。（炬燵が推薦した）

たまたま今期は他に立候補者が居なかったなので、流れてこうなった。

「んー、まあ、山茶花は仕方ないよ。渋々なつたわけだし。私は、やりたくてなつた生徒会長だからさ」

何処か自慢気に、炬燵が腕を組んだ。

「お前は生徒会長になるために生まれたのか……」

「そうかもね！」

おかしそうに彼女は笑って、友達の輪に戻っていった。

それから、放課後。

俺は、生徒会室に居た。もちろん、生徒会として役割をこなすために居るのだが、職務は炬燵一人が迅速に行ってしまう為、実際やることがない。

なので、生徒会室にいるもの実質自由時間として、本を読んだりして時間を潰している。

「白卯。手紙、手紙。預かった。与った」

生徒会室で一人パソコンをしていると、七夕と七月が入ってきた。

羽佐間 七夕と羽佐間七月は、見た目通り双子だ。

髪色はブラウン色で、天然パーマ。七夕がショートで、七月がセミロングなので見分けることが出来るものの、それ以外は全てそっくり。

目はぱっちり二重で、燦るような瞳があり、瞳は紫色をしている。

高等部1年でありながら、先生からの推薦で当選したスーパード双子。本当は会長に推薦させようとしたらしいが、校則により適わなかった。

俺的には、それ以前に双子同士の依存症が激しいと思う。悪くいえば、百合。

「白卵。はい、どおぞ」

そう言って、七月が白い封筒を手渡す。

「あんがと」

貰った封筒には、差出人は書いておらず、不明。

まさか、朝の奴か？

……やはり、赤い蠟がおされている。

朝と同じ、高そうな封筒を開けた。

『手紙を棄てましたね？ つまり、拒否ということですね？ ふふふつ。ざーんねん。あなたの大切な人が死んじゃいます。』

さようなら。ぐっばい、あげいん。

「世界とうさぎさんを救おうの会」

邪劫の、嫌がらせかと思っただ手紙。

そして、学校に来てから、棄てた手紙。

「おい、七月、七夕。この手紙、誰から貰った？」

七月と七夕は、二人で手を繋ぎ口リポップを口に含んでいた。

そして、俺の方を見て、いつもどおりに薄く微笑む。

「知らない女の人だよ！」

嫌な汗が、頬をつたった。手紙を握る手に力がこもり、生唾を飲み込む。

嫌がらせじゃない、と何となく確信した。

「ねえ、白卯。何て書いてあったの？教えて教えてっ」

二人は、幼女のような無邪気な弾んだ声で聞いてきた。

でも、教えてることもできず、虚ろな目で何回も手紙を読み返す。

死ぬなら、誰が？

幼なじみの炬燵か？それとも、肉親である父、いや、祁劫か？

まず、外交官の父なら大丈夫だろう。そもそも海外まで大規模なものとは思えない。

「へえ……。死んじゃうんだあ」

「七月なら、祁劫ちゃんだな。だって、幼なじみより肉親殺した方が、ざまあみろ！って思うもん」

「七夕も！！ 祁劫ちゃん殺すっ」

「テツメエ等……」

人が真剣に考えているというのに、横から見たらしい、脳天気な二人の言葉に、俺は呆れた声をあげた。

(とりあえず……)

片手で手紙を握り潰し、スライド式の、黒の携帯を取り出す。そして、電話帳から”炬燵”の名前を探し、電話をした。

1コール、2コール、

早く出てくれと、本心から願う。

「もしもし、白卯？何？」

無事、だった。

何ともないような、明るい声に安堵の溜め息をする。

「今、何処？」

「え？生徒会室のまえ」

それと、ほぼ同時に。

ガラッ

白の携帯を耳に翳した、炬燵が現れる。

「 やあっぱり！！ 祁劫ちゃんだねっ」

クスッ、と双子が嘲笑に似た笑みを浮かべた。

第4話 現実起こる不運

人見知りで俺にしか感情を表せない祈叶。

もし、手紙のことが本当ならば、家族である、祁劫を助けないといけなかった。父親や母親にかわって。

今、この地にいる肉親は俺だけなのだから。

「っ、炬燵、行くぞ!!」

「はっ?ちよつと、何よつっ!!?」

万が一に備え、炬燵も側におかなければならない。彼女の腕をつかみ、そのまま、中等部に向かっつ。

炬燵は若干不服そうにしているが、俺の雰囲気では何かを感じ取ったのか、黙ってついてくる。双子は、生徒会室にいるつもりらしく二人で仲良く机の上に座っていた。

中等部は、高等部の横に隣接していて、渡り廊下で繋がっている。その廊下は、五階にあつて、生徒会室は2階だ。五階以上の建物は原則的にエレベーターをつけなければならないので、もちろん完備されている。だから、丁度来たエレベーターに乗り込んだ。

祁劫は、中3だから、3階。渡り廊下を渡ったら、また下に戻らなければならない。

五階まで行く間の時間、祈叶に電話をかけた。焦る気持ちばかり先行して、うまく携帯が使えなかったが、五階に来る頃には発信できた。

「お兄ちゃん?何?」

1コールで、平淡な、感情を伺わせない声が聞こえる。よかった、と心底思う。僅かに、脱力感がした。

「というか、電話は学校内じゃやめてって言ったじゃん」
携帯を通して呆れたため息が聞こえた。

ちーんっ、

エレベーターが五階に止まり、走り出す。

「わりつ、今どこ?!?!?」

中等部の生徒は、まだ自律精神とかうまくないからという理由で、校内で、携帯は基本的に、使ってはいけない。朝来たら、先生が回収するのだ。

……まあ、祈叶は持ってないふりをして持っているらしいが。

「……何で」

何処か、嫌そうに言う。

「急用?!?!」

構わず喋り続けると、暫らく沈黙が続いた。

「5階の、家庭科室の隣の、……お、お手、洗……い……」

恥じらいを隠しきれしていない、もじもじとした声。

「……わりい……」

気まずい沈黙が訪れた。

「そうだよな。1コールで気づけて、尚且つ先生に気づかれないのは、トイレ内だけだよな」

今までのシリアスさが吹っ飛び、平然とした心持ちになる。

うん、と力無い祈叶の声がした。

「なに、どうしたの?」

心配そうに炬燵が横にならんだ。電話の会話は聞こえなかったらしい。

少し安心する。炬燵がさっきの会話を聞いたものなら「なんていう破廉恥!」とでも言つて鉄拳をくだしたかもしれない。

俺は苦笑だけを一瞥くれてやった。

「お兄ちゃん? なに? 切るよ?」

めんどくさそうな祈叶の声がする。

「あ、いや、じゃ、じゃあ、家庭科室で待っていてくれっつ」

なんか微妙に罪悪感もってきて、慌てて言葉を、繕った。だが、返事はなく、言うと同時に、

ツ ……ツ ……

と、電話が切れた後の電子音が聞こえた。

「平気？」

「いや、あ、平気だけど……」

首をかしげる炬燵に、俺はあいまいに苦笑を送っておいた。これは、もし何もなかったら祈叶に何か買わなければならなそうだ。

心の中で深くため息をついた。

すぐに五階のトイレの方に走りだす。

炬燵はなにも言わずに、後ろについて来る。無事に生きていたとはいえ、まだ安心は出来なかった。

「祈叶っつ……！！」

目先に、俺と同じ髪色をしたのを、短いツインテイルにした少女が居た。

「お兄い……ちゃんっ！！」

無表情が柔らかい笑みを湛えこちらに気づいて駆け出した。脱力感が一杯だった体から更に何かが抜けていく。まだこんなに緊張していたのかと、我ながら笑ってしまう。

だが、その安堵も束の間。

「きゃああああっ！！？」

知らぬ少女の叫び声が家庭科室から聞こえてきて、俺の体は再び緊張して足を止めてしまった。反射的に、あいている窓から中を見る。

なっ、と間抜けな声が出る。

包丁が、飛び交っているのだ。

そして、何本もの包丁が祈叶側の窓を突き破る。一応窓から距離はある祈叶だが、動揺して動けずにいた。

「あ」

そして、それは、真っ直ぐに、祈叶の方へと飛んでいった。

「祈、祈劫っ」

有り得ない現象。

この世界には、能力者も魔女も存在していなかった。いたら、きつと大騒ぎだ。

なのに、重力に逆らい包丁は自在に動き回ら、あまつさえ、祈葉を狙った。

俺の思考は真っ白になり、動くことさえままならず、刹那が刺されるさまを見るはずだった……、のだが。

「っ」

突如、金髪を有した青年が祈葉を押し倒して、飛んできた包丁を白羽取りのように取った。青年が取ると、包丁はそれっきり動かなくなり、あたりを飛来していた包丁も、力無く床に落ちて、渴いた音をあげる。一瞬の出来事のようにだった。

立ち尽くす俺と、炬燵。そして、やっと祈葉の呻く声で我に帰る。

「祈葉っ、大丈夫かっ!!!？」

俺も動揺を隠しきれずに呆然としていたが、頬を叩いて祈葉の元に駆け寄った。

座りこむ祈葉に合わせて俺も横に座り、抱き寄せる。

「ったく、どんな超自然現象だ？めんどくせえ」

けっ、と青年は悪態をして包丁を廊下に投げ捨てた。それから、俺らを一瞥する。

「……ありがとう」

「はっ？」

青年が眉をひそめ、ヘッドフォンを耳から外した。

「てめえに感謝される日が来るなんてな。……それがあんたの妹か？」

廊下にヤンキー座りをした青年は物でも見るかのように、祈葉を見た。すっかり祈葉は平然としていたが、内心では未だに整理がついていないだろう。ぼんやりと、青年を見ていたが、名前を呼ばれ不快そうな表情をした。

恥ずかしい、という顔だが、祈葉を知らなければ、どこからどうみても不快そうな表情だ。

「ああ、祈葉。中等部三年の、俺の妹」

「へえ」

そう言うわりには全く興味の無さそうな返事だ。「懐かしい、な」

「は？」

祈叶を覗くように、視線は祈叶から離れず、怖くなったのか、祈叶は俺を抱き寄せた。

「……さざんかあ？」

地を這うような、低い声に俺と祈叶は身を震わした。何年もの仲だ、この声はやばい。

「会長、居たんだ」

青年は悠然と立ち上がり、炬燵に目をうつした。「知ってるかしら？ あなた、今日で79回生徒会の仕事をさぼってるのよ」

表情は聖母マリアのような慈愛に満ちた笑顔だが、両手は強く握りしめられている。漫画とかなら、髪はあらぶり、オーラはどす黒いことだろう。実際、そう言う風な幻覚が見える。

「謝るなら、まだ、許してあげる」

それを見て、青年は挑発的に笑んだ。

「捕まえられたらな」

青年はヘッドフォンをつけなおし、きびすを返して走り出した。

「山茶花ああああああっ！！」

それを、炬燵が追いかける。なんか、むしろ微笑ましい。

「お兄ちゃん、あの人……」

「ん？ ああ、天鷹 山茶花っていつて、同学年の生徒会委員」

そう、あれが天鷹 山茶花。生徒会会計のサボリ魔だ。

「天鷹先輩……、お礼言うの忘れてた」

山茶花が去った方を見て、祈叶がそんなことを言う。

「まあ、また今度な。今日はもう帰るか。炬燵にはメールしとくし」

俺が立ち上がって手を差し出すと、祈叶は小さく頷いた。

「せんせー、こっちー！！」

走る音と、生徒の声。放課後で人が少ないと言えど、家庭科室

には人がいた。

「い、行くぞ、祈叶！」

「う、うんっ」

先生に捕まると何かと面倒なので、一先ずここは逃げることにした。

野次馬が居なくてよかった、と心底思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7140y/>

兎さんと狼さん

2011年11月21日23時31分発行